

最後の一人まで 小さな支援の役割

ノンフィクション作家
柳田邦男



「織物はこうして染めると色落ちしませんよ」。NSCJのスタッフのアドバイスを聞きながらの作業。村人たちに笑顔がこぼれる

1995年1月17日の阪神・淡路大震災は、日本の大都市が経済成長を経て初めて経験した大地震だった。死者6434人という惨状が報道されたこともあって、被災者の支援、街の復興のために、さまざまな分野の専門家をはじめ、学生や主婦を含む一般の人々が、全国から続々と駆け付けてボランティア活動をした。「災害ボランティア活動元年」という言葉も生まれた。

この時、ボランティアの思想あるいは指針として生まれた言葉がいくつかある。その中でも、「最後の一人まで」という思想はとて大事なキーワードだと、私は受け止めている。

国や自治体の支援事業は、法規や予算に縛られる。そしていったん支援の範囲が決まると、その枠を超えた問題については手を差し延べるといふことをしない。

例えば、神戸市内で暮らす付き添いの必要な障害者が、何らかの理由で大阪まで出かけなければ

ならなくなった時。介護者は神戸の市域外にまでは付き添って出かけることができないため、身近な人、もしくはボランティアの人に頼まなければならない。

あるいは、仮設住宅に入居しているひとり住みの高齢者が、2日も3日も姿を見せず、配達された牛乳がドアの外に置かれたままになっている時。早く異常を見つけて孤独死を防ぐといった見回りが必要だが、そういう活動までは行政は手を出さない。彼らが孤立しないように、触れ合いのカフェを造るといふこともしない。

このような隙間に目を向け、支援の手を差し延べるのが、規制や予算枠に縛られないボランティア活動の神髄だ。そして、そういうきめの細かい活動のスピリッツを示すキーワードが、「最後の一人まで」なのだ。私も当時、何度も被災地に出かけて、災害ボランティア活動の基盤を築いたりリーダーたちと付き合う中で、そういう思想が生み出され定着していった経過を見たのだった。

そして今、20年以上前の内戦時に数百万個の地雷が埋められ、今もなお、国土の至るところで被害者が出ているカンボジアの一角で、現地の農民たちが何とか自立して生活していける道を開くのを支援するNPO法人Nature Saves Cambodia-Japan (NSCJ)の手伝いを私はしている。

主な支援対象は、カンボジアの首都プノンペンから車で7、8時間かかる北西部のバタンバン州バダク村。代表を務める友人の詩人・山本賢蔵さんは、かつてメディアの特派員だったころ、この村の地雷被害者たちの悲惨な状況をつぶさに見ていた。

日本などの支援で地雷は撤去されても、荒れ果てた土地を昔のように綿畑として再生させるには、井戸掘り、綿の木の種の購入、何十台もの糸紡ぎ機や付加価値を高めるための機織機の購入などが不可欠だ。しかし、貧困にあえぐ農民たちにはそれだけのものを購入する資金がない。地雷で片足あるいは両足を失った農民は、職に就くこともできず、途方に暮れていた。

山本さんは彼らを何とか救済できないかと仲間と話した。そして集まったのは、写真家、織物作家、精神保健福祉士、出版編集者、グラフィックデザイナー、事業コンサルタントなど、それぞれに忙しい仕事をしている人たちだ。私もこの団体の平社員になって手伝いをしていく。2009年の立ち上げ時、山本さんらは何度も現地を訪ね、まずは綿畑用に2ヘクタールの土地の確保、綿の木の種と糸紡ぎ機50台の購入を進めた。

現地の活動の中心になっている農民夫妻は、共に

に地雷で足を失くし、心中しようと考えていた矢先、NSCJと出会った。メンバーの写真家・石井麻木さんは、最初に夫妻を訪ねた時、あまりに暗い彼らの表情に衝撃を受けたという。しかし小規模ながらも綿畑プロジェクトが動き始め、再び彼らを訪問した時には、目が輝き、村人たちと共に満面の笑みを浮かべるほど元気を取り戻していた。人は未来への希望を失ったら、生きることができない。しかし、希望を取り戻すことができる瞬間から、生き直すことができるのだ。

NSCJは現在、現地で生産した織物の品質を上げるための技術指導や、日本での企業や個人の販売先開拓に奔走しながら、団体の会員募集と募金集めに苦勞している。

そんな中でも彼らが守り抜いているのは、現地に法人を設立して工場を造り、綿の大量生産、製品の大量輸出といった企業ベースの大規模事業化はしないという方針だ。生産から流通に至るまで、いくつもの中間企業がそれぞれにマージンを取るようになれば、農民の収入は低く抑えられてしまう。景気が悪くなると工場が閉鎖され、解雇された農民が路頭に迷うということが起こり得るからだ。

バダク村で救済し得る人々は、わずか数十人かもしれない。しかし、たとえ小規模でも中間搾取のない永続性のある自立への道を歩むことができるようにするのが、NSCJの最終目標だ。これは「最後の一人まで」という思想の発展形であり、NGOの小規模な活動だから丁寧に配慮できるのだと考えている。



廃れかけていた織物の文化がカンボジアの農村にのみがえった



<Profile>

やなぎだ・くにお
1936年栃木県出身。東京大学卒業後、NHKに入局。全日空羽田沖墜落事故、カナタ太平洋航空機墜落事故、BOAC機空中分解事故を追ったルポルタージュ「マッハの恐怖」(フジ出版社)で第3回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。退職後はフリーのノンフィクション作家として活躍。近著に「終わらない原発事故と「日本病」」(新潮社)、「生きる力、絵本の力」(岩波書店)など。

写真：石井 麻木